

2010年度 広島・島根交流神楽

つきいちのまい
月一の舞い

特別公演

創作神楽

巖島

清盛の夢は千年の時を超えて

月一の舞い特別公演は、去る9月5日(日)広島市ALSOKホールで開かれた「ひろしま夏の芸術祭2010」のメインとなった創作神楽「巖島」をご覧いただくものです。

この新作「巖島」は、神楽の舞台芸術性を更に高めたものとして仕上げました。

これまで、神楽を支えて頂いた地域の皆様へご覧頂くための初舞台として開催します。

どうぞ「郷土の誇り・神楽の現在」をご鑑賞ください。

プログラム

伝統を受け継ぐ

「安達ヶ原」川北神楽団

深化する神楽

「紅葉狩」山王神楽団

「大江山」原田神楽団

新たなる挑戦

創作神楽「巖島」琴庄神楽団

企画・構成 石井 誠治

台本・脚本 石丸 賢太郎

演 出 崎内 俊宏(琴庄神楽団)

平成22年 11月21日(日) 千代田開発センター

北広島町有田1234-1

開場:11:00 開演:12:00

photo by yuk☆kii

伝統を受け継ぐ

「安達ヶ原」

川北神楽団 (山県郡安芸太田町)

深化する神楽

「紅葉狩」

山王神楽団 (北広島町)

「大江山」

原田神楽団 (安芸高田市)

休 憩

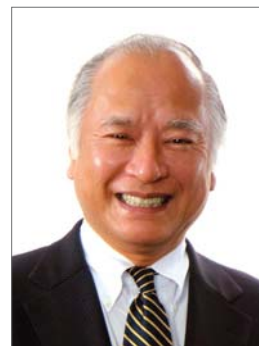
新たなる挑戦

創作神楽「厳島」

琴庄神楽団 (山県郡北広島町)

ごあいさつ

広島・島根交流神楽実行委員会
NPO広島神楽芸術研究所 理事長
日隈 健壬



このたび広島県により2010年「ひろしま夏の芸術祭」上演のために委託された創作神楽「厳島」は、9月5日、満席の県立文化芸術ホールに於いて琴庄神楽団の熱演をもって上演することができました。これもひとえに、「広島・島根交流神楽」を日頃よりご支援いただきました皆様方のお陰でございます。ここに改めてお礼を申し上げ、その成果を今日ここ北広島町の、この舞台でご披露させていただけることを関係者一同、大いなる喜びに感じております。

この作品「厳島」は、企画、構成、演出はもとより、登場する主人公の平清盛とその妻時子そして平氏嫡流の、その人を演ずる者の表現力、その場を再現する演出力たるや観る者の予想を遥かに超えるものでありました。特に劇的なラストシーンは劇場の隅々からおこなつた共鳴の拍手喝采の嵐で、その芸術性の高さが証明されたと理解しております。

広島神楽は、全国の神楽の中でも、とくにその演劇性の高さに神楽としての評価が分かれるものがございましたが、そのことが今日、これまで能や歌舞伎でもって平家物語を演じる舞台であった厳島に、このたび神楽「厳島」が添えられることになったとも考えられます。

民俗学者折口信夫が言うように、神楽が鎮魂であるならば、八百年を超えて我々日本人が愛してやまなかつた人生の栄枯盛衰を一代で演じた清盛一族への鎮魂の詩を見事に戯曲化した創作神楽ではないかと関係者は自負しているところでございます。どうぞ、この演目の中に、皆様方にとっての厳島と清盛、あるいは平家物語に見る記憶の風景をお楽しみいただけますことを期待しております。

"育つ"は"巢立"と同源で同根でございます。すべて芸術は見てくださる者がいて昇華するものでございます。今後とも、皆様のご支援をよろしくお願い申しあげまして、ご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございます

伝統を受け継ぐ

「安達ヶ原」 川北神楽団 (山県郡安芸太田町)



あらすじと解説

平安時代の中頃、鳥羽上皇が玉藻前(たまものまへ)という美女を寵愛されるようになると、体調を崩され世が乱れ始めます。

これを不審に思った陰陽師・安倍泰親(あべのやすちか)が玉藻前を占うと、玉藻前は唐の国で悪行を重ねた末、わが国へ逃亡した金毛九尾(きんもうきゅうび)の悪狐だったのです。この悪狐は、正体を見破られると京の都から安達ヶ原へ飛び去り、再び美女に化けて旅人を襲うようになります。

那智(なち)の大法師・東光坊阿闍梨祐慶(とうこうぼうあじやりゆうけい)は剛力を従え修行の途中、陸奥国安達ヶ原(むつのくにあだちがはら)にさしかかったところで日は暮れてしまい、出会った美女に一夜の宿を借りようとしませんが、美女は悪狐となり襲いかかり、剛力は食い殺され、法師は辛うじて逃げ去ります。そして、弓の名人三浦ノ介・上総ノ介(みうらのすけ・かずさのすけ)が悪狐退治に向かい退治する物語です。

《出演》

法 印……月長 孝治
剛 力……大倉 幸人
姫 ……郷田 亮

狐 ……藤田 賢司
狐 ……藤田 拓海
狐 ……河野 智恵子
三浦乃介……国本 福太郎
上総乃介……佐々木 一紀

大太鼓……郷田 忠孝
小太鼓……河野 智幸
手打鉦……河野 洋一郎
笛 ……佐々木 郁江

神楽団プロフィール

川北神楽団は、明治26年に9名で矢上系石見神楽を受け継ぎ、昭和初期には浜田八調子の大江山などを取り入れ、当時としては画期的な神楽団だったようです。

平成5年に結成100周年を迎え、これを機に神祇舞いを加え、10年1月には『四神』が無形民俗文化財の指定を受けました。

今後、後継者の育成と共に川北の神楽の保存伝承に力を注ぎたいと思います。

深化する神楽

「紅葉狩」 山王神楽団 (北広島町)



あらすじと解説

平安時代の中頃、信州信濃(長野県)の守(かみ)・平維茂(たいらのこれもち)へ『悪行を重ね、世に災いする戸隠山に棲む鬼を退治しよう』勅命が下ります。維茂主従は、鬼退治のため戸隠山の獣道(けものみち)を登ります。

すると、戸隠山麓の紅葉は秋の陽を受け、燃え盛る炎の絨毯の景色の中で、姫に化身した鬼女が『紅葉狩の宴』を開いていました。主従は誘われるまま宴の客となり、酔い伏してしまいます。麗しき姫は鬼に変わり、主従を取り食らおうとします。

その時、維茂が日頃信心する神様が現れ、姫の正体を告げると共に神剣を授けます。

そして、正気を取り戻した維茂主従はみごと鬼女を成敗するという物語です。

《出演》

平 維 茂……藤 岡 進 矢
清原成時……井 上 亮
更 科 姫……前 翔 太

赤 蜘蛛……霜 江 勇 弥
白 蜘蛛……川 野 一 輝
大 鬼……中 川 克 也
八幡大菩薩……平 田 俊 文

大 太 鼓……田 坂 真 吾
小 太 鼓……前 原 誠
手 打 鉦……藤 井 英 昌
笛 ……川 本 喜 美 代

神楽団プロフィール

明治中期に地元、山末神社氏神祭に神楽を奉納するため、神社周辺の人々によって「下本地神楽団」として発足した当神楽団は、昭和25年、神社に奉られている「山王権現」から名を頂き「山王神楽団」となり、現在にいたります。近年においては、ロシアサンクトペテルブルグ建都300年祭に、千代田混成神楽団の一団体として参加し、また、日韓芸能交流公演で、韓国のコリアンファンタジーと共に、国立劇場にて公演を行うなど県外の公演にも力をそそいでおります。練習の都度、あるいは公演の都度「演技の粋をかたむけて」を目標に、今後も芸の習得に取り組み、伝承・保存に努めてまいります。ご支援、ご指導のほど宜しくお願い致します。

「大江山」 原田神楽団 (安芸高田市)



あらすじと解説

平安時代『都の果て 一条・戻り橋に鬼が出た』『朽ち果てた都の玄関・羅生門に鬼が棲む』と言われ、妖術を使う鬼たちは、京の都へ舞い降りて悪事を重ねていました。

そこで朝廷は、鬼の根城を陰陽師・安倍清明に占わせると、清明は「丹波国・大江山」と告げます。そして、都の守(まもり)・源頼光(みなもとのらいこう)と四天王は、勅命を受け、大江山の鬼退治に向かいます。険しい山を登り始めると、日頃信心する神様が現れ、人が飲むと力が湧き鬼が飲むと毒になる『神便鬼毒(じんべんきどく)』の酒を頂きます。更に登ると洗い物をする都から誘われた姫に出会います。

この姫に鬼の岩屋へ案内させます。鬼の頭(かしら)酒呑童子は、頼光の一行が山伏姿であることから山伏問答を仕掛けてきますが、その終わりには山伏と認め、頼光の一行が持参したお神酒を「都の酒」と喜んで飲み、酔い伏してしまいます。

そこで、頼光主従は鬼たちに挑み、壮絶な戦いの末成敗します。

《出演》

源 頼 光……河 野 英 利
卜部六郎季武……升 田 洋
坂田金時……垣 内 和 久
紅 葉 姫……上 野 将

酒呑童子……水 重 剛
茨木童子……市 尻 篤 識
唐熊童子……河 野 伸 良

大 太 鼓……清 水 成 美
小 太 鼓……水 木 敏 博
手 打 鉦……松 岡 健 一
笛 ……原 田 健 次

神楽団プロフィール

原田神楽団は、安芸高田市高宮町の原田八幡神社を守護神として祭礼にいそしんでおり、上演可能な演目は17以上を保持しております。「後継者育成」「地域文化の伝承」をテーマとし活動しています。地域の方々の御協力により子ども神楽も発足し、次の時代を担ってくれる若い世代を育てながらさらなる発展を目的に団員一同頑張っています。今後とも温かいご支援ご指導をよろしく願いいたします。

新たなる神楽

創作神楽「厳島」 琴庄神楽団 (山県郡北広島町)



Photo by yuk

解説

この神楽は、神話と伝説、史実を組み合わせた厳島神社縁起を基とする物語です。

須佐之男命を親神とする市杵島姫(いちきしまひめ)ら三人の女神は、国家鎮護の支えたらんと、筑前宗像(ちくぜんむなかた)より東へと向かい、瀬戸内へ入りました。やがて、女神達の目の前に気高い山を頂く、美しい島が現れ、その荘厳なる景色に心奪われた女神は、この地に鎮まります。

市杵島姫は「神霊を齋(いつき)祭る島」の意味を持っていることから、この島は、「イツキマツル」・・・「厳島(イツクシマ)」と呼ばれるようになります。

その五百年の後、平安時代の末の事、安芸守となった平清盛は、一族を引き連れ、厳島へと参詣し、その靈験あらたかなる神の島を敬い、一族の守り神とします。

その御神徳を我が物とした清盛は、平家の棟梁から、太政大臣という天下人の極みへと登り詰め、「平家にあらずんば、人にあらず。」と言わしめた平家一門の全盛期を迎えていきます。『清く盛えよ清盛』とその名前に祈りを込められ、その天賦の才によって、この世のすべてを掌中に収めた清盛は、瀬戸内海の大自然をもその庭先とした壮大なる現在の厳島社殿の基礎を建立しました。

栄えるを極めれば、栄えるに任せて蹴落とし、葬り去ってきた僧侶、公家、源氏等の政敵達が清盛を黄泉(よみ)の旅路の供とせんと、冥府(めいふ)の闇より襲い掛かってきます。陰陽師「安倍泰親(あべのやすちか)」と清盛の四男「知盛」の助勢を得て、これを退けますが、清盛は、その因果の呪い故か、熱病に倒れます。

四年後、平家一門は、壇ノ浦の水泡へと消え、清盛の妻・二位尼時子は、「波の下にも都は、候ぞ。」と幼き孫・安徳天皇を抱き、波の下に都を求め、一族の幕を下ろします。

その数年後、時子の遺骸が厳島へと流れ着いたといわれます。

朱の鳥居の袂に待つ清盛の魂に引き寄せられるように・・・

時代の寵児となり、その夢に向かって走り続けた清盛。

彼の祈り空しくその幕を引いた平家一門。

時代に敗れた彼らを英雄と語る事は、無かったです。

しかし、千年もの昔、海外貿易を以って、国が栄えることを図り、大海原に海の道を見出し、瀬戸の海を拓くと言う大事業を成し遂げ、今日、「世界遺産」と称えられる厳島を残した清盛こそ、わが郷土・広島にとって史上最大の英雄のひとりである事に違いありません。

出演

平清盛……若狭義文
二位の尼……菊本靖彦
(平時子)

市杵島姫……野上正宏
俊寛僧都(怨霊)……(二役)

田心姫命……東成憲
左馬頭義朝(怨霊)……(二役)

湍津姫命……大田学
藤原信頼(怨霊)……(二役)

佐伯鞍職……桑本芳雄
安倍泰親……栗栖和昭

平知盛……山根陵

大太鼓……大田守
小太鼓……山本智之

手打鉦……斉藤誠治
笛……崎内佑結

神楽団プロフィール

琴庄神楽団は、北広島町(旧豊平町)の中心に位置する庄原八幡神社と琴谷天日神社を守護神とし崇拝してきておりますが、昭和48年神楽同好会が発足し、町内の神楽団より、八調子、六調子の神楽を習い奉納してきました。その後、高宮町の神楽団から神楽を習い昭和60年に琴庄神楽団となりました。歴史の浅い神楽団ではありますが、おかげ様で、現在では各地からお声をかけていただき奉納をさせていただいております。今後とも、温かいご支援の程よろしくお願い申し上げます。



企画・構成
NPO広島神楽芸術研究所理事
石井 誠治

『広島県の風土・歴史を象徴するような物語の神楽は出来ないだろうか』という課題をいただいた数日後の朝早く、私は宮島の海岸を歩いていました。宮島が世界遺産であることしか知らない者が宮島＝厳島の縁起や歴史を知ろうとする姿だったのです。何度も宮島へ渡るうちに、市杵島姫(いちしまひめ)や平清盛が新作物語のイメージの舞台へ登場して来ました。平安末期、源平合戦に敗れた平家一族は、「平家物語」などの作品を通じて、日本の歴史の中で良い印象で語り継がれていません。しかし、平清盛は千年の時を超えて世界に誇る宝物＝厳島を広島に遺してくれた大恩人であるにちがひありません。こんな思いが、創作神楽『厳島』の物語の構成の出発点だったのです。新しい演目づくりは、想像以上に様々な分野からのエネルギーが要ります。神楽どころの地域に育てられた神楽団をはじめ、神楽を支える面・衣裳・採物・かつらなどの工芸家と脚本・舞台演出などの人々がこれまでの経験と情熱を結集して仕上げたものが『厳島』です。



台本・脚本
石丸 賢太郎

今回の企画では、まったくの0からの完全創作神楽となりました。

しかし、であるが故に問題も多く、複数の時間軸をまたぎ、一瞬で数百年の時間を遡ります。

既存の神楽には、存在しなかった技法が必要となり、また“神楽”として存在させる為に既存の技法を如何に取り入れる台本を作るか、という難題に取り組んできました。

また、その峻烈な性格によって“悪人”のイメージがつきまとう清盛を英雄として扱う、難しさ。その意志の明朗さを如何に表現するか、御注目いただければ幸いと存じます。



演出
琴庄神楽団 団長
崎内 俊宏

約30年前、地域の方々のご支援により、神楽団のなかった琴庄地区に生まれた歴史の浅い神楽団ですが、「いつまでも挑戦者の意欲を忘れない活動」を心がけてきました。今回、創作神楽「厳島」公演のお話を頂いた時、大きなおどろきと不安が私の中で錯綜しました。今もその気持ちは変わりません。ただ、9月5日のALSOKホールでのお客様の拍手と、スタッフ皆で流した涙は、一生忘れる事のできないものでした。これまで、広島神楽を支えて頂いた、大会主催者の方・神楽ファンの方、神楽を支えて頂いている地域の皆様、日々精進を重ねている神楽人の皆さんに敬意と感謝の気持ちで一杯です。この創作神楽「厳島」が少しでも広島神楽の更なる発展に繋がっていくことが、私たちの暮らしている地域の活力を高める事・地域の活性化に繋がると信じて、これからも私なりの「神楽道」を歩んでまいります。



神楽面
管沢面工房
管沢 良典

島根県から千代田(現北広島町)へ移り、神楽面工房を開いて10年目に『広島県民文化奨励賞』をいただきました。これは私に神楽面師としての自信と希望を与えてくれ、いつかは恩返しができる工芸家になろうと思っていました。あれから15年。広島神楽を全国へ発信するという壮大な事業の『厳島』に参画する話をもらった時から、今自分の持つ能力の全てをもって作品づくりに取り組みました。特にこれまでの神楽の演目にはなかった怨霊の面の創作は初めてのことで、うらみ・にくしみ・かなしみ等を意味する幽玄の面づくりを手掛けたことは、今後私自身の創作活動に大きな財産として残りました。



神楽衣裳
かぐらや
管沢 秀巳

こどもの頃から神楽を舞ってきて、神楽の衣裳づくりを手掛けるようになりました。そして、私たち『かぐらや』の作る衣裳は、神楽を舞って来たからこそ出来る衣裳を念頭に、舞い姿や衣裳の重さを考えて図柄を構成して来ました。このたび平清盛の衣裳づくりをはじめると同時に、これまでの伝統的な衣裳づくりにはない様々な課題が持ち上がったものです。平氏の家紋は何なのか。平安後期の朝廷貴族の衣裳はどうだったのか。創作神楽を仕上げていく上で、関係者との打ち合わせを繰り返して、これまでに味わったことのない緊張した日々が続きました。いよいよ図柄が決まり、金糸・銀糸の肉もりを決め、平氏の家紋・あげは蝶が仕上がっていく中、物づくりの厳しさと喜びを味わいながら、この衣裳を着て舞い終えた平清盛に盛大な拍手が送られる姿を夢みて、不眠不休の日が続いたのです。



神楽採物
神楽工房こだま
児玉 敏之

神楽の採物を作り始めて8年。平清盛の刀を造ることになった時、8年目でこんな大きなチャンスがやって来るとは思いませんでした。さっそく、厳島神社国宝展の冊子の中に収録された刀の写真を参考に試行錯誤の日々がはじまりました。複雑な金具の形を整形して取り付けるのにボンド一つ強弱色々なものを探して実験しながら使い、これまでの経験ではない手間のかかる仕事になりました。中でも、刀の表面船体に一枚の金箔を張るのは息をとめての作業で、この年になって初めての作業でした。出来上がって、清盛が舞台上でその刀を持って舞う姿に涙が出ました。刀一本に私の人生をかけた思いがしました。



神楽かつら
天空工房
山本 貴範

創作神楽『厳島』の演者の付けるかつらを担当させていただき、新しい演目が出来上がる過程すべてを勉強させてもらい、私にとっては素晴らしい経験になりました。三女神は、普段から作り慣れている『姫がつら』ではなく、神様が付けるかつらづくりを考え、神話の中に登場する女の神さまの資料を集め、関係者のイメージを重ね合わせて仕上げました。また、三体の怨霊は、僧・公家・源氏と三様の個性を持ち、鬼のガッソー造りとはまったく異なる材質で整形しました。これまでになく面師と相談しながらの仕上げでしたが、製作者側のイメージに合ってもつけにくいものであったりで、本番まで手直しの連続でした。